

[座談会]

SFC は減びてもいいし、総合政策が減びてもいい。黙ってベストを尽くせ。



阿川 尚之 <専門：米国憲法史、日米関係論>
慶應義塾大学元総合政策学部長

Naoyuki Agawa
Former Dean, Faculty of Policy Management,
Keio University



河添 健 <専門：調和解析>
慶應義塾大学元総合政策学部長

Takeshi Kawazoe
Former Dean, Faculty of Policy Management,
Keio University



國領 二郎 <専門：経営情報システム>
慶應義塾大学総合政策学部教授 / 元総合政策学部長

Jiro Kokuryo
Professor, Faculty of Policy Management, Keio University
Former Dean, Faculty of Policy Management,
Keio University



進行
土屋 大洋 <専門：国際関係論>
慶應義塾常任理事 / 慶應義塾大学前総合政策学部長

Motohiro Tsuchiya
Vice-President, Keio University
Former Dean, Faculty of Policy Management,
Keio University

総合政策学部と環境情報学部は1990年に開設された。開設期の熱狂については多くの記録が残っている。しかし、30年間のうちの後半部分についてはどうだろうか。2007年から2021年まで総合政策学部長を務めた4人に集まってもらい、在任中、何を考え、何を語っていたのかを振り返ってもらった。

§ 着任時に考えていたこと

土屋大洋 今日テーマは、先生方が総合政策学部の学部長になったときに何があったか、何を考えていたかです。

私は2019年10月に学部長になりましたが、ひどいことが続きました。学部長になったばかりのときに台風19号が来て、キャンパスの近くの小出川が少し溢れました。一段落してやれやれと思っていたら、次に新型コロナウイルス感染症の世界的流行が来て、2020年2月の入試まではぎりぎりでしたが、その後、2020年度春学期の授業が全部オンラインになってしまった。そして春学期がようやく終わったと思ったら、9月末にサイバー攻撃が来て、授業支援システムのSFC-SFSがやられてしまっていて授業開始が1週間遅れる、ということがあったわけです。

悪いことばかりではなく、未来創造塾構想の施設である「 β (ベータ) ヴィレッジ (これまで「未来創造塾 EAST」の区画名称で呼ばれていた)」が建ち上がりました。もう半分の「WEST」と言われているほうも、こちらはH (エータ) という施設名称で呼びますけれども、ようやく形が見えてきました。

この未来創造塾の構想は、小島朋之学部長(2001年から2007年に在任)の下で学部長補佐をされていた阿川先生の発案でした。

その阿川先生はかなりイレギュラーなかたちで学部長に就任されました。2007年2月の学部一般入試の挨拶に本来壇上に立たなくてはいけない小島学部長がいらっしやなくて、阿川先生がお話をされ、「あれ?」と思ったことを鮮明に記憶しています。それから、小島先生のご病気がだいぶ悪いということがあって、阿川先生が、2月19日から学部長代行に就かれました。その後、たしか学部長選挙を早めて、6月1日から正式に学部長になられたと思います。阿川先生はそのとき何をどう思って学部長になられたのでしょうか。

阿川尚之 小島先生にはとてもお世話になりました。そもそも、1999年に総合政策学部の教員に採用していただいたときも審査していただいたはずですし、特に在米大使館に2002年に広報文化センター所長兼公使として転出できたのは、一にも二にも小島先生のお力によるものです。2年

間の約束だったのが、加藤良三・駐米大使から「もうちょっと在米大使館にいない?」と言われた。「もうちょっとってどのぐらいですか」と大使に訊いたら「できるだけ長く」と言われたので、小島先生にこわごわ電話して、できるだけ長くとは言えないので、「1年くらい」と延長をお願いしたら、「ばかやろう、おまえ、外務省なんか辞めちゃえ。すぐに帰ってこい」とか言われてえらく怒られた。でも、それも許してくれて半年ちょっと長くしてくれたのかな。そんなことがあった。

在米大使館から慶應に帰ってすぐ小島先生と食事をしたんです。そうしたら突然、「私はもう疲れたから、次の学部長選挙、君、出ろ」と言われて、「帰ってきてこれから勉強しようと思っているんだから、絶対に嫌だ」と答えた。

長い話を短くすると、「学部長選挙に出ないのなら、私が続けるから学部長補佐になれ」と言われたのがそもそもの間違いの始まりでした。補佐って何をするのか知らなかったのですけど、「お手伝いしろということだったら何でもします」と言ったんですよ。

それで、2007年の入試のときに電話がかかってきて、小島学部長のご体調がよくないので、「あなたが今日から代行です」と。「なぜ?」と聞いたら「補佐だから」と言われて、「えっ?」と驚いた。学部長に何かあったら補佐が代行をつとめるという規則があったんですね。全然知らなかった。代行になったのはまったくの事故。それで、小島先生のご病気がご病気だったので「正式に学部長をやれ」と言われて、早めに選挙をした。とにかくやりたくないから「お願いだから私を選ばないでください」と教員の皆さんに訴えたのだけれど当選しちゃって、頼み方を間違えたかなと今でも思っているんです。

ですから、何か抱負があって学部長になったわけじゃない。それじゃあ、なぜ途中で放り出さずに比較的眞面目に学部長として働いたかという、とにかく私の無理なお願いをなんども聞いてくださった小島先生への恩返しだから、やることはやろうと思った。したがって私の使命は、何か大きな目標を立ててそれを実現することではなく、現状を何とか維持して次の人につなぐことだ、と眞面目に思いました。

あの頃「おかしら日記」というのをずっと書かされていて、今もありますよね。慶應を退職する時、最後にもう一回書いて辞めましたけど、学部長就任のときに書いたことを今もはっきり覚えています。今のコロナ禍の状況とちょっと似ているんだけど、麻疹の流行で学校に誰もいなかった。そんな状況でこの部屋（学部長会議室）に来たんですよ。窓の外に目をやって見渡しても、誰もいない。で、「ほとんど誰も気づかないまま就任した新学部長のもと、SFC での教育・研究が日々変わることなく活発に行われ、その成果が世に問われ、卒業生が巣立ち、新入生が到着する。そして時が経つと、誰も気づかぬまま、学部長がいなくなっていた。そんな風でありたいと、怠け者の新学部長は願っています¹⁾」と書いた覚えがあるんです。その文章は残っているけども。

土屋 残っています。

阿川 それで、そのとおりになった。

土屋 國領先生は、最初は日吉の大学院経営管理研究科にいらして、その後、環境情報学部に来られて、SFC 研究所の所長もされて、2006 年に総合政策学部に移られた。國領先生が 2009 年 10 月 1 日に学部長になられて順風満帆に行くのかなと思いましたけれども、1 期目の終わりですかね、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災 (3.11) が来てしまった。

國領二郎 そうでしたね。

土屋 私も、國領先生が学部長のときの学部長補佐を 4 年間させていただいたので一緒にしました。震災などももちろん予期しておられなかったと思いますが、ご就任のときは、どんな気持ちで何をやろうと思っていらしたのでしょうか。

國領 2006 年に私が総合政策学部に来るお膳立てをして下さったのがやはり小島先生でした。2003 年から 2008 年に動いていた政策 COE（文部科学省 21 世紀 COE プログラム「日本・アジアにおける総合政策学先導拠点—ヒューマンセキュリティの基盤的研究を通じて—」）を何とかしなきゃいけないけど、「環境情報学部だと政策 COE のリーダーにふさわしくないから、総合政策学部に移ってほしい」と小島先生に言われて総合政策

に来ました。そのとき政策 COE の最後の 3 年間で、とにかくまとめてきちっとアウトプットを出さないと赤っ恥をかくので、すごい勢いでやりました。いまだにパンフレットに「実践知の学問です」と書いてありますけれど、それはそのときにまとめました。「そもそも総合政策学って何なの」とか、そういうようなところである程度形を作ってアウトプットを出さなきゃいけないよねと言われて、それをせっせとやりました。

そろそろ終わるなと思っていたその真っただなかに小島先生が倒れられて、阿川先生が学部長になられた。

その後、2009 年に阿川先生が常任理事になられたので、後任の学部長になりました。置き土産としてお預かりしたのが「未来創造塾」で、「ああ、でっかいのを作らなきゃいけないのね。募金もやらなきゃいけないのね」というので、せっせとその準備をしました。

2008 年のときに阿川先生が書いた計画書を元に塾が土地を買いました。しかし、リーマン・ショックが来て思うように構想が進まなくなった。放置されている土地をそのままにするわけにはいけないので、「ちゃんとやってください」と言われていた。

土屋 課題を残していったのは阿川先生ということですね。

阿川 それはそうです。

國領 まあ、ルーツは小島先生だった感じが——。

阿川 そうね、言えてる。

土屋 2013 年に國領先生が常任理事になられたので、10 月、河添先生が学部長になりました。記録を見る限り、在任中に震災とかそういうものはなかったようだけれど。

河添健 そういった意味ではあまり大きなことはなかったですね。安定期で粛々とやっていた感じかな。でも警察署に接見に行きましたし、裁判の被告人にもなりましたね。

そもそも未来創造塾の話が出てきたときに、國領さんや村井さんが「多額の寄付を集める」と言ったのね。私はそれに猛反対して、学部長選挙のときに「そんなものは非現実的だ」と言って、なんか当選しちゃった。

だから、どちらかという SFC の夢物語をちょっと現実に引き戻す、というのがたぶん私の役目だったと思っています。

もう一つは、その頃、村井〔純・環境情報学部長〕が結構頑張っていて、「SFC といえば村井」というイメージが外から見ても強かった。私は総合政策学部長になったときに環境情報学部だけが目立つ SFC というのはおかしいじゃないか、それを払しょくしたい、ということでいろいろやりました。2011 年 9 月に環境情報学部で開始されていた GIGA プログラム (Global Information and Communication Technology and Governance Academic Program) も総合政策学部はやっていなかったの、対等になくてはいけないと思い、2015 年度に Global Information and Governance Academic Program と名称を改めて総合政策学部でも開始しました。その頃の留学生は IT 系が多く、総合政策学部の留学生を GIGA で採りたかった。そうすることによってたぶん総合政策学部と環境情報学部が対等になるのではないかと考えて留学生の受け入れに結構力を入れました。北京外語大からの編入生の受け入れも成果ですね。

阿川 何か誤解があるようだけど、私が過大な夢を作って、皆がアジャストするのに苦労したわけでは——。

河添 いや、それは大変な夢だった。

阿川 というか、私自身は、「これは大変だ、無理だ」という話があったときに、「いつやめてもいい」と言ったし、遠藤周辺の農家を借りて未来創造塾を始めてもいい。そう思っていました。だから、建物の建設ばかり計画する委員会での議論などには違和感があった。

河添 「テントでもいい」と言っていたよね。

阿川 言っていたし、実際にその実験をやりました。

河添 その精神は全部引き継ぎました。

國領 東京から 50 キロ圏のこの立地で生き残っていこうと思ったら、やっぱり滞在施設がなきゃ駄目でしょう。だから、別に引き継いだからやったというだけではないです。

阿川 もちろんそう。色々なビジョンがあって、それを発展させて皆さんがおやりになったと。私が唯一言いたいのは、加藤寛さん〔初代総合政策

学部長] なんか SFC の将来について考えていたことを記録を通して振り返ると、福澤諭吉が義塾を創設した時のことを彼らは明確に意識し、手本にしていた。それは福澤さんが学んだ緒方塾とか教えた築地鉄砲洲の奥平家中屋敷など、座敷でやっていた少人数の半学半教の試みだったのですね。ですから私の頭の中にはそういうイメージが多分にあった。けれども私がいなくなった途端に、全体像について皆さんがいろいろ再考するのは当然のことで、この構想の実現にこぎつけた皆さんにはとても感謝しています。

河添 トータルで見ると非常にいい方向に向かっていて、正しい道を歩んでいるような気がします。きっちりと未来創造塾構想のもとで進んでいるという意識を持っています。

§ 在任中の課題

土屋 在任中、何が最大の課題だったのでしょうか。もうちょっと言うと、できなかったけどこういうことをやっておきたかったということがあれば、伺いたいと思います。

國領先生は、3.11 が一番大変だったんじゃないかと思いますが。あれ以外にも大変なことがありましたか。それともあれが一番ですか。

國領 やはり、未来創造塾と 3.11 です。

土屋 未来創造塾は、募金集めが大変だったんですか、それとも案を作るところでしょうか。

國領 未来創造塾については、客観情勢として 50 キロ圏キャンパスでやっていこうと思うと宿泊施設がないと駄目だ、というのはそのとおりだと思っていました。大変だったのは具体的に動かしていくこと。募金の話になったのは理事になった後の話ですが、やってる間に東日本大震災後の建設費の暴騰に見舞われて計画が狂い、大変さが続きました。実は今はコロナで大変で、未来創造塾は大変の連続——。

学部長任期の後半は、3.11 対応が結構長引きましたね。そのときの学生たちがものすごく真面目だったのが印象的でした。危機が起こると、日頃「問題発見・解決」をしようと呼びかけているので、皆「俺たちが何と

かしなきゃ」と思うのですよね。

河添 あの頃は学生もそういう雰囲気がありましたね。

國領 ありましたよ。

河添 授業よりはボランティアに行きたいとかいろいろね。コロナ禍の今はどうなの？ あのときとはちょっと違うの？

土屋 「家にいろ」と言わなきゃいけないので。

河添 なんか学生がしょげちゃっているよね。

土屋 オンラインではいろいろやってくれていますけども、やっぱり外に出て一緒にというのはなかなか無理ですね。

河添 学生のほうから「乗り切ろう」というのが出てこないものね。

阿川 これまで経験したことのないタイプのハードシップでしょうね。ある意味全然違うている。

土屋 でも、オンライン授業は学生が手作ってくれていますよね。

國領 それは本当にそう。

土屋 河添先生はどうですか。

河添 私がやり残したという感覚があるのは、最初に「2020 年までに留学生を 20%に増やしたい」と言っていたのが全然未達成であることですかね。まだ 5～6%でしょう。10%にも行っていない。

阿川 私は、やり残したことが一つある。2011 年度卒業生への借りというか。

SFC 担当理事でしたから 3.11 の時はキャンパスがどうなったか心配しました。震災後、初めてキャンパスに戻ったとき、表面上は何ごとともなかったように、春の景色は美しく、空気は暖かく、そのなかを歩いていたら、福澤諭吉の銅像の前に学生が 2、3 人集まって何かしている。「どうしたの？」と声をかけたら、「正式の卒業式がなかったので、私たち福澤先生の前で自発的に卒業式をやっているんです」と言って、在校生が卒業する学生に、卒業証書を読み上げて渡していたんです。ちょっと涙がこみ上げてきて、私もそのとき飛び入りで卒業証書を渡した、おぼろげな記憶があります。

彼らから「先生、私たちの卒業式、いつかやっていただけますか」と言われ、「いや、それ、頑張ってみるよ。いつかやれるようにしたい」と

言っただけ、まだそれができていない。3.11のあの年に卒業した諸君の卒業式を、いつかやってあげられればいいなと思う。

抽象的に「問題発見・解決」と言ってきたけれど、3.11の時は学生がけっこう実際にやるなと思った。石巻へ行って、地元出身のSFCの学生の家で雑魚寝して、震災直後地域の復興の力になろうと頑張った学生が出てきた。彼らの体験談を直接聴いて、やるなと感心しました。それはSFCに限らず全国的な現象でもあって、それまで「やる気がないんじゃないか」とか、「ゆとり教育の何とかだ」とか言われていた若い人が「やれる」、「やった」ということに感動した。

当時は国際連携担当の常任理事だったので、ロンドン、ニューヨークなどに相変わらずしばしば出張していたんですけど、そのたびに、ビートルズの“ブラックバード”の歌詞にある“You were only waiting for this moment to arise.”という題で何回もスピーチをしました。「日本の若い人たちはできるんだ。こういう機会が訪れるのを今まで待っていたんだ」と、繰り返し言った。私はこの時の感動を今でも大事にしています。

役職にあった間は、「日々、嫌な仕事をやらされているな」と憂鬱だったし疲れていたけれども、このような感動が時々あったから、私は学部長と常任理事と合わせて6年間続けられたのだと思いますね。そしてその感動は主として学生諸君から貰うんです。教員の仲間からそういう感



動を受けたことはほとんどないけどね。

一同 (笑)

§ 世界、日本、慶應義塾における総合政策学部

土屋 世界、日本、慶應義塾の中において総合政策学部をどう位置づけるか。

今後どうあってほしいかということも含めて最後に一言いただきたいと思います。

河添 総合政策学部が慶應義塾においてどういうリードを保つかということをはっきりと打ち出したほうがいい。今は SFC の中の総合政策学部だけど、慶應義塾の中で目立つことをやったほうがいいと思っています。そして日本で、世界で注目される。

國領 世の中 SDGs と言っていて、世界中の大学がどっちかという 이슈・オリエンテッドになりつつあります。その影響を受けて慶應全体もやっぱりそっちへ動こうとしているところがあります。その中で SFC に対する理解は深まってきていると思います。これを脅威と見るか、チャンスと見るかなんですけど、うかうかしていると脅威です。だけど、30 年やってきた経験値というのはばかにならない。その経験値を活かしながら、ある意味では大きなトレンドの中での一番、トップブランドになる可能性、チャンスがあるとは思っています。それができるかどうかが勝負ですね。

阿川 私はこういう質問が嫌いで、世界の中で、日本の中で、慶應義塾の中で総合政策学部をどう位置づけるかとずうっと言い続けているけれど、それはコンプレックスの一種だと思います。SFC だけでなく、慶應全体でも、さらに日本人全体が、「世界の中の」というのが好きですね。私を含めて世界なんてごく一部しか知らないのにね。私はすでに辞めました。が、総合政策学部は教員・学生がそれぞれの分野で一所懸命学び、教え、一緒に研究する場であって、それに対して強い思いがあるのは当然です。しかしそれを無理やり、世界の中、日本の中、慶應の中でどのくらいのレベルなのか、誰々より上か下かと、位置づけばかり考える必要はない。ただ一生懸命やればいい。気がついたら、日本一、世界一になっている

かもしれないけれども、それは結果です。

話は飛びますけれど、福澤先生は「学問のすゝめ」を言ったけど、同時に「学問に凝る勿れ」ということも書いている。私は、慶應義塾あるいはSFCを愛するのはいいけれど、悪ノリするな、ペラペラ喋るな、黙って愛せと。総合政策学部も「総合政策はこうだ」「こうであるべきだ」とか一々言うな。黙って愛して黙って力をつけろと言いたい。画期的な結果を出せば、世の中は認める。しかしうかうかしていたらすぐに抜かれちゃう。世界の中のSFCがどうのこうのという話ではないんですよ。

河添 ほぼ賛成なんだけど、ただ、世界の動きの速さと日本の動きの速さのずれが生じていて、このままでは日本自体がもう危ないというのが私の感覚ですね。福澤先生の考えからすれば、もっと世界をリードする慶應義塾であるべきです。やっぱり慶應義塾もちょっと弱くなっているのではないかと心配しています。

阿川 でもさらに言えば、私は世界も慶應も衰退する可能性があると思っています。より良くなる保証はどこにもない。どういうふうに衰退するか、衰退するときに何をするのかが大きな課題であって、大事なミニマムなところはしっかり押さえつつ緩やかに歳を取りながら時代の要請に応えるというのも、悪くはないかもしれない。そしてその土台の上に立って、いつか突然、SFCや慶應から出た人が私たちの考えを根本から変える新しいパラダイム、まったく違うパラダイムを作ってくれるかもしれない——。これは日本全体の重要な課題でもあると思っています。

パラダイムを変えたという意味では、幕藩体制が250年続くなかで福澤という人が出たのは、ほとんど奇跡だったと私は思う。外国にちょっと行っただけであれだけの観察をし西洋文明の本質を理解して帰る人が出た。あれから150年経っても福澤先生ほどの考えに達した人は慶應にはいない。福澤の同時代人ものちの人たちも、ある意味で日本を超えていたこの人をなかなか理解できず、彼の思想が危険と見なされたことさえあった。第二次世界大戦の後、ようやく認められるようになった。まだまだ定着したとは言えないけれど、ある意味福澤は常に新しい。

だから、古くなったSFCは減びてもいいし、総合政策が減びてもいい

し、慶應が減びてもいいけど、その焼け跡、滅亡の跡から何か新しいものが、慶應のタネ、SFC の遺伝子をもって再生することがあるかもしれないと思っています。

その形態は二つあると思いますけれどね。シュンペーターみたいに破壊して創造するのか、それとも徐々に変化が起きて、気がついたらすっかり変わっているのか。実は大きく舵を切った人がいたのだけれども、本人は言わない、よく分からない。しかしその中で、それぞれの教員、学生がベストを尽くして、気がつくと総合的な力がついて良い方向に向かっていったというのが良い。

私は保守主義者ですから後者の方が好きだけど。でももしかすると破壊が必要なかもしれない。

河添 やっぱり学生をどう育てるかということにかかってくると思う。教育ってそういうものじゃないですかね。

阿川 教育は出会いだと思っていますけれどね。

河添 確かに出会いってというのは大事だと思うね。私だって大学4年間で何を勉強したのかあまり記憶にない。出会いがすべてですね。ただ、やっぱり総合政策学部で出会ったからには、そこでのちゃんとした教育、そういうものをもっと前に出してほしいなとは思っていますね。

阿川 まあ、そこは長い議論になるので――。

土屋 「もう30年、まだ30年」ですから、次の30年があるといいなと現職としては思いますけれども。

河添 30年はたぶんないと思うね。

阿川 あるよ。だって、組織はここまで来ちゃうと生存が目的になっちゃうから。面白い学校ではなくなってしまうかもしれませんが。それを、あるときパラダイムの違う人が現れて、あるいはとても指導力のある人が出て、変化をもたらす――。それを期待しています。

そもそも SFC 自体、慶應義塾の既存の秩序の中において倦き足らなくなった人たちが、もがきながら別のところに新天地を求めた、そのまだ未完成な試みの一つの成果です。新大陸に丘の上の町を打ち立てようと大西洋を渡った17世紀英国のピューリタンのようなところがある。当時の

塾長以下よくやったと思いますよ、本当に。何にもないところにこのキャンパスを作ったんですからね。この建物一つを作るのにどれだけの会議をして、どうやってこの階段を作ったのか、大変な時間とエネルギーを使っていちいち考えて。それが本当にベストだったかどうかわからないけど、その人たちの努力というのもきっと出会いから生まれたんです。

土屋 総合政策学部と環境情報学部は「双子の学部」とよく言われますけども、双子でも性格が同じである必要は全然ないと思っています。そこは喧嘩しながらでも何でもいいので、お互いがやるべきことをやっていると思えばいい結果が出ると思っています。

今日はどうもありがとうございました。

一同 ありがとうございました。

注

- 1) 阿川尚之 (2007) 「新しく学部長になって」 https://www.sfc.keio.ac.jp/deans_diary/002503.html.

(記録作成 置塩 文)

(写真撮影・総合政策学部4年 藤田 明優菜)

座談会開催：

日時 2020年11月30日(月) 10:00～12:00

場所 SFC本館3階第1会議室